

Akutagawa Studies

[Akutagawa REVIEW]

vol. 13

Articles

Animal Anarchism:

Osugi Sakae and Akutagawa Ryunosuke's "Rashomon" — HORII Kazuma... 1

"moral" of GENIN

—Through comparison with "Rashomon" and "Crime and Punishment" — MIYAZAKI Yoshiko... 16

A Study of Akutagawa Ryunosuke's Handkerchief:

Through the Gifu Paper Lantern — XIE Yinping... 31

The menace of Double:

Akutagawa Ryunosuke's "The Two Letters" — MURAYAMA Rei... 46

Themes of AKUTAGAWA Ryunosuke's Unfinished Novel "Rojo"

— KONNO Akira... 60

Akutagawa Ryunosuke's "A Letter from the Fourth Husband":

Focus on the image of "The Wandering Jew" — ZHOU Qian... 75

Akutagawa Ryunosuke's "He second"

— Based on the dream of "I" — JIN Xianghua... 87

Symposium

Comment from the coordinator — MIYASAKA Satoru... (1)

Akutagawa and Modern Russian Literature

—Centering around his Adolescence— — ICHIKAWA Yumiko... (3)

The Circumstances of Akutagawa Ryūnosuke's Encounter with Russian Literature:

Focusing on the Direct Contact between Komiya Toyotaka and S. G. Eliseev — MIZOBUCHI Sonoko... (11)

How Akutagawa understood Turgenev's "A Lear of the steppes"

in his student days — MOMIUCHI Yuko... (19)

The Study of Akutagawa Ryunosuke in Russia — RUZHEVA Margarita... (31)

2019

International Society for Akutagawa [Ryunosuke] Studies

- Allusions on Akutagawa Ryunosuke in the Works
of Japanese and Russian Writers — KHRONOPULO Liala... (33)
- Religious Longing of Ryunosuke Akutagawa and his Dostoevsky-Experience:
concerning his relation with the Eastern Christianity — YAMANE Michihiro... (37)
- Reports on International Society for Akutagawa Studies
The thirteenth Society — KAGAWA Masako... 107
— LIU Dongbo... 108
— MIYAZAKI Yoshiko... 109
— JIN Xianghua... 110
— SHIBATA Nozomi... 112
— MURAYAMA Rei... 113
— SUZUKI Noriko... 114

日本作家とロシア作家の作品における芥川龍之介の引喩

フロノープロ・リアーラ
(KHRONOPULO LIALA)

本稿では、20世紀の作家の作品における芥川龍之介についての引喩と芥川龍之介の作品からの引用を検討してみたい。

岡本かの子(1889-1939)は1936年に、芥川龍之介をモデルにした『鶴は病みき』というデビュー小説を発表した。この作品の中で芥川龍之介は麻川^{あさかわ}莊之介^{しょうけい}として、また自分は葉子^{ようこ}として描かれている。雑誌『文学界』でこの作品を紹介したのは、川端康成であった。1923年の夏に鎌倉に行って偶然に芥川と同じ旅館に投宿した岡本は、芥川に何回か会って話をしたのだが、4年ぶりに再会したときには、芥川が「病みし鶴」のように見えたことに、岡本は驚いた。その後、芥川の自殺のを知り、彼に電話をしなかったことを後悔した。もし電話をしていたら、多分芥川を救うことができたかもしれない、と思ったのだ。作品の中の葉子は、誰にも分かってもらえない麻川を理解することができるという確信があり、麻川も葉子の才能に感心した、と岡本は書いている。

『鶴は病みき』は龍之介の欠点ばかり書いていると言う批判があった。確かに、この作品には龍之介が絶対人目にさらしたくないであろう不用意な姿、つまりマイナス面が多く描かれているが、川端康成は「深い愛情によって書かれたものである」と書いているように、岡本は、作品本文の表現を借りれば「心性のある部分が澄明な白梅に似ている」龍之介への愛惜の情を持ってこの作品を書いたのではないだろうか。発表当時からこの作品について賛否両論あるように、小説として決して出来がいいとは言えないこの作品が多くの人に読まれたのは、龍之介への関心と興味からであろう。

森田たま(1894-1970)の1936年のデビュー作『もめん随筆』には「芥川さんのこと」というエッセーが含まれている。このエッセーの芥川は、岡本の『鶴は病みき』とは逆に、冗談に満ちたインタビューで構成されている。例えば、

…芥川さんはいまいましいといふ顔つきで、「あの先生には臍がないんだ

よ、だから、臍の話をするにあんな妙な顔をするのだ。—しかしその代わりあれには尻尾があるんだよ。怖いね。」

芥川さんは続けて、「見つけたら蛙に臍のなき事を。内田百閒には臍がないのさ」愚直な私はおぼおぼと、

「それはいま芥川さんがおつくりになったのでせうか」とおたずねした。

「いえ」と答へながらちらりと上目づかひに私を見た芥川さんの眼の色に、いちめつ子がからかふような、はっとさせる光があった。

「芭蕉の句です」

ほんたうに芭蕉の句なのかそれとも一茶の句なのかやっぱり芥川さんの即興であったのか、私は誰にもたづねて見ないからいまだにそれを知らないのである。(森田 1974, p.225)

この句は勿論、芭蕉のではなく、横井也有(1702-1783)という江戸時代の詩人(俳人)のものだった。このエッセーでは、女性作家を少しからかう子供っぽい芥川が描かれている。

面白いことに、芥川についての引喩がある上の2作とも、1936年に発表された女性作家のデビュー作であった。

ミステリー作家である阿刀田高(1935-)は、1986年(角川文庫、初出1983年)に『待っている男』という推理小説を発表した。この短編の主人公は、彼をゆすった元彼女を毒殺して、死んだ彼女と出来るわけがない喫茶店でのデートをしたいと思っている。主人公である殺人犯は、来るわけがない彼女との会話を想像するのだが、その中に芥川の作品についてのくだりがある。

芥川龍之介は知っているでしょう。

あ、知っている。いくらなんでもね。

“尾生の信”って小説があつてね。もとは中国の話なんだろうけど。

あれ、いつ頃の話なのかな。漢くらいなのかな。

とにかく尾生って名前の男がいたんだ。そいつが、女と約束をして……。

「橋の下で待ってて。あとから行くから。いい、橋の下よ。絶対に他所に行かずに待っててね」

てなこと言われたんじゃないのかな。

いくら待っても女はやって来ない。そのうちに川の水量がどんどん増して来て、膝が濡れ、腰まで水が来て……それでも女は現われない。

—約束の場所を動いちゃいけないんだ—

とうとう水が背丈を越え、尾生は溺れ死んでしまった。それでも女はやって来なかった。

辞書を引けば描いてありますよ。“尾生の信→愚かなまで忠実に約束を守ること”って……。かわいそうに。死んだうえに馬鹿者の代表にされちまって……。

で、芥川龍之介がちょっと弁護しているんだよね。あの人も臍曲がりだから。

だれも尾生を笑うことなんかできない。ゆっくり考えてみれば、人間はだれだって当てにならないものを心に描いて、じっと死ぬまで待ち続けているんじゃないか……って。

小説家だけあって、うまいこと言うよ。

そんなこと、たしかにあるかもしれんなあ。

でも尾生は阿呆だったから死んだんじゃないかって、意地を張り続けたんだろうね。

あんまり長く待たされると、

—もし俺がここでなんかの事故で死んだら、あの女、どう思うだろ。“私が約束を守らなかつたばかりに……”ってしばらく悔やむだろうな—なんて思ったりしてね。(阿刀田 1986, p.8-10)

もう一人のミステリー・推理小説家である、ロシア人作家アクーニン・ボリス(本名はチハルティシヴィリ・グリゴリ)は、日本文学研究者でもある。ところで、「アクーニン」というペンネームは、日本語の「悪人」からとったものだ。チハルティシヴィリは『作家と自殺』という本で、芥川の自殺を分析している。「この日本人作家の作品には、homo scribens(作家全体)の心理的特徴がよく現れている。典型的なプロフェッショナルであるからこそその病が見て取れる。芥川は、ライターズブロック(創造性の喪失の不安)の犠牲者で、創造性の衰退が始まったような気がしたとき、自殺を決めたのだ。言い換えれば、これはライターズブロックそのものではなく、ライターズブロックへの恐怖、創造性の喪失を前にしたパニックだったのだ。」(Чхартишвили 2001, c.412-414)と、チハルティシヴィリが書いている。

参考文献

- 阿刀田高. 1986. 「待っている男」『待っている男』角川書店：5-26.
森田たま. 1974. 「芥川さんのこと」『現代の女流文学 第三巻』毎日新聞社：219-226.
Чхартишвили Г. 2001. Писатель и самоубийство. Изд. 2-е. М.: Новое литературное
обозрение. 576 с.

(フロノープロ・リアーラ/サンクトペテルブルク国立総合大学東洋学部日本文学准教授)